

「わかる」社会科の授業づくりを目指して —生徒の目線と教師の目線を大切にしたい授業実践の経過—

中明 加奈枝(平成 29 年度教育実践コース修了)

1 探求テーマについて

「目指す授業はどんな授業か？」大学院に入ってから何度問われたか分からないが、常に考え変化しながらこの探究テーマ『「わかる」社会科の授業づくりを目指して』にたどり着いた。これは、新任教諭が最初に躓く問題に向き合った、授業づくりの土台となる部分だと考えている。

当初は生徒の立場から授業や学校を見て、生徒に寄り添った支援や授業実践を行いたいと考えていた。しかし、授業実践で失敗を重ねたことにより、教師の立場からどのように授業づくりに取り組んでいくのかに重きを置いていくようになった。教材研究、学習課題、学習活動の工夫、ワークシート、発問と指示、時間配分、資料提示など教師が行う 1 つ 1 つの手立てが生徒の授業参加状態に影響することを学んだ。

しかし、やはり教師本位で学習活動の構成を判断、選択、決定していくと、生徒の授業への参加状態はあまりよくない。1 年前期からの課題意識で学んできた「生徒を見取る視点」を生かして、授業を実践するクラスの実態を把握し、生徒の思考に寄り添うようにしながら、教師としての手立てを盛り込んでいくようにして、授業をつくっていった。そして、生徒の実態に即した授業づくりを生かして「わかる」面白さ、楽しさを感じられる社会科の授業づくりに近づいていきたいと考えている。

2 生徒側から授業を考える

(1) 生徒を見取る視点の獲得

長期実習は、特別支援学級の生徒の支援から始まった。その生徒の通常学級における授業の参加状態がよくなるためにはどんな支援が必要であるのか考えていった。そこから、特別支援学級の生徒だけではなく、授業の参加状態がよくない生徒にも注目し、授業の参加状態が低くなっている要因について分析していき、授業の参加状態を向上していくための視点を見つけていった。

授業の参加状態が低ければ、授業づくりをどれだけ頑張っても、生徒は学べていないのではないかと考え、そこから、

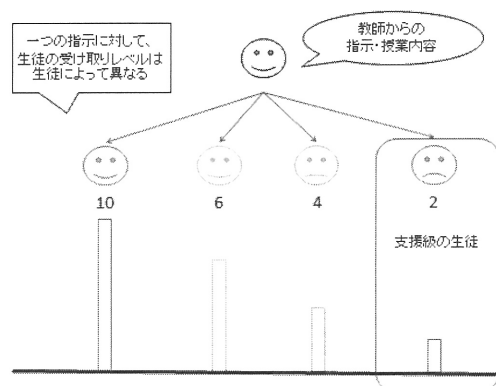


図1 生徒の参加状態の見取り①

図1のように、学級の中には授業への参加状態が様々な生徒が混在していると捉えた。その生徒たちを同じ目線で見のではなく、「学習意欲」「学習スキル」の2つの視点で生徒を見取っていくことで必要な支援が見えてくるのではないだろうかと考えた。

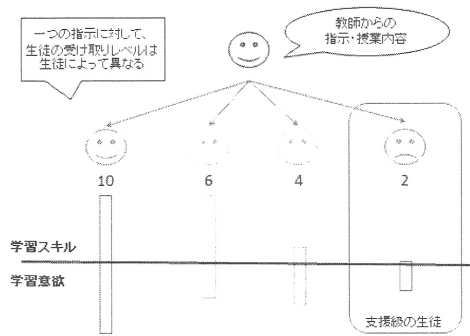


図2 生徒の参加状態の見取り②

「学習意欲」「学習スキル」の視点を活用して生徒の参加状態を見取る考え方を現したものが資料2である。先輩教諭たちは、これまでの経験から自然と参加状態のよくない生徒たちを見取り支援をしていっている姿は実習の中で多く見られた。

経験の浅いストレートマスター（以下ストマス）には、その見取りは難しく「学習意欲」「学習スキル」の視点を活用し、生徒の参加状態を考えることにより、必要とされる支援を具体的に考えることができるようになるのではないかと考えた。

（2）授業づくりにおける「学習意欲」「学習スキル」の視点

ストマスが求められる授業力を身につけていくためにも、この視点を生かすことが出来るのではないかと考え、授業づくりにおける「学習意欲」・「学習スキル」の視点を以下のように生かし、授業づくりに挑戦していくこととした。

①学習意欲

学習意欲とは、「学びたい」という思いだと捉えている。大学講義『教育課程の理論と実践』では、学習意欲の低下と「やる気」を課題と考え「学ぶっていいことだなと思える子ども」を目指す姿として編成された教育課程を学んだ。（新潟大学教育学部附属新潟小学校平山先生）そこでは、「学びの活用」がある教育課程が行われ、学んだことが教科を越

えて活用できるようになっていたり、総合や学活につながる学びになっていたり、ただ学んで終わるのではなく、学んだことを実際に使って何か問題を解決したり、新しいことに挑戦したりできるようになっていた。また、大学講義『授業開発と実践』『授業における学習研究』では、教師が協働的学習で学ばせたいと思ったときに、協働したくなるような学習課題を設定しなければならないと学んだ。例えば、学習課題は答えのない「開かれた問い」（例：これから私たちはどうしていけばよいだろうか？）を生徒に提示することで、他者の意見を聞き、自分の意見を確認し、より納得できるものを模索していこうという意欲へとつながっていく可能性がある。

つまり「教師が学ばせたいこと」を「生徒が学びたいこと」に結び付けていくことが大切だということだった。

②学習スキル

学習スキルとは、問題を解決するための能力だと捉えている。大学講義『学校経営の理論と実践』『発達理解の理論と実践』では、能力が異なる生徒同士が助け合い、学んでいく環境となるような学級づくりの重要性を学んだ。「できないこと」の中には、できるようになれることと、できるようになるには時間がかかる（難しい）ことがある。それを、できなくてもよい、やらなくてもよいという雰囲気をつくらないことが大切であり、そのために、人間関係や、学級のルール、といった基礎的環境整備が必要である。そうすることによって、学習スキルの差があっても、授業の参加状態が低下することを防ぐことにつながる。

また、授業づくりでは「今できること」と「これからできるようになっていきたいこと」明確にすることが大切だと学んだ。新たな学習スキルを身につけるためには、今の状態を把握して学習活動を組み立てることが大切であるということが心に残った。

3 教師側から授業を考える

(1) 授業実践を通して

①授業実践「近畿地方」

生徒の実態を「学習意欲」「学習スキル」の視点を活用しながら理解を深め、学習活動を工夫した。授業実践を行う学級の生徒たちは、調べ学習や自分の考えをまとめる個人作業には積極的に取り組むが、発表やグループ発表など他者と関わりながら学んでいく場面では消極的であった。そこで、これまでの授業で活用してきたイメージマッピングと付属長岡中学校の研究授業で活用されていたラウンドテーブルの方法を組み合わせて、1枚の紙に調べた内容を書き込み、他者の意見と自分の意見を視覚的につなげながら話し合いを深めていくことを狙った授業を構想した。

②生徒の姿

授業実践の中で、目指す生徒の姿に近づくことができたと考えられる場面があった。

巡回中の教師に1班の生徒Sが「話し合いにならない」と声をかけてきた場面

生徒 S「Wさんは建造物が残ってるって言うのに、Mさんは建物を見直したって逆のこと言ってるんだけど？共通点も探せないどころか、違うこと言ってる」

(生徒同士が言い合う)

教師「なんでちがうんだらうか、同じ建物のことをいっているのだからか？最近？昔の建物？」

WさんとMさんはそれぞれ自分の書いた建物に関する話を始めた。

『逆 なぜ…？右は近代的ビルとか 左は伝統的なものとか』

という記述がグループの紙に残っていた。

図3 抽出場面

各自調べた内容で、「建造物」という言葉が共通しているが、「残っている」と「見直した」という記述の違いにより

グループの中で混乱が起きていた。その違いについて話し合っていくことが深い学びにつながっていくと考えている。

③省察

授業づくりでは、ぎりぎりまで授業内容が決まらず、生徒たちの実態に合わせて工夫したい方法ばかりが中心になっていた。教材研究でも教材観は広がっていくが、本単元で生徒は何を学んでいくのが曖昧であった。

授業実践を終えて感じたことは以下の2つある。一つは、生徒が単元を通して何を学び、授業が終わった後どんな姿を目指しているのかを明確にしなければ、中身の無い授業になってしまうということ。教材研究をしていくと、もう一つは、授業の内容は無限とあり、その中で教師がどんな授業を行いたいのかを具体的にしていかなければ、生徒が何を学ぶのかわからないということだ。つまり教材観を持つことが大切であるということ学んだ。そして、幾通りもある学習内容、学習活動を構成していくうえで、生徒の実態を把握していくことで、様々な授業方法の中から選択していくことができるのではないかと考えた。

(2) 単元を通して考える授業づくり

授業づくりの難しいところは、学習活動でやりたいことを単元のどのタイミングで、どのように取り入れるか、教材研究の内容を生かすには導入か展開か、その方法はどうか、また学習課題の内容、提示の方法はどうか、基本的な、単元の目標、1時間後との目標とまとめなど、考えなければいけないことは様々で、どこかが変われば必ずと他の箇所も変わっていくことだ。

その連動する単元全体の変更が上手くいかず、授業の構想が何度も崩壊した。そして、授業の構想が見えなくなりギリギリまで授業の内容が確定せずに、模擬授業ができないまま実践授業をすることに

なり、焦ってしまい、探求テーマに沿った授業を行うことができなかった。

全体を連動させながら変更ができない理由は、主に2つあったと考える。一つは、単元全体の流れが見えないまま、検証したい活動内容にこだわったり、気になったところを部分的に変更したりしたこと。もう一つは、指導していただいた内容を自分のものにできないまま授業に取り入れてしまったことである。

そこで、授業づくりの段階で単元観と単元構成を一つの台紙にし、常に全体の流れを意識し、単元を通して学ばせたいことと照らし合わせながら構想していけるように工夫した。付箋を活用し、指導いただいた内容や教材研究の内容を付け足したり、取捨選択をしたりしながら考えていった。そうすることによって、活動内容を付け足し深めたり変更したり、時間配分の変更などにも対応したりしながら、考えることができた。また、教授から予想される生徒の反応を書き出しながら、付箋と付箋（活動と活動）のつながりがあるか、生徒の具体的な発言からつなげていくことができるか、考えていくということも教えていただいた。

4 「わかる」社会科の授業づくり

(1) わかる」とは

「わかる」にも種類があり、教科や学習内容に応じて目指す「わかる」の意味が異なる。「わかる」状態を目指すためには、「知りたい」「考えてみたい」「わかりたい」という思いを引き出すことが大切であり、教師の学ばせたいことを生徒の学びたいことにつなげていくことが大切である。そして、学んだこと、わかったことを実際に使える活動を取り家、学びの活用ができることが大切である。

(2) 「わかる」授業づくり

「わかる」授業づくりを行うために大切であると考えていることは2つある。

一つは、生徒の実態を見取る視点となる「学習意欲」「学習スキル」を活用して、生徒の実態に合った学習活動を構成していくこと。

もう一つは、単元観、生徒の実態、目指す生徒の姿、評価を明確にして、単元を通して授業構成を行うことである。

これらのことを大切にしながら、目の前の生徒たちがどのように学んでいくのかを、1単位時間、1単元、1年間、時には義務教育期間全体を見通してどんな力を身につけさせていきたいのかを考えながら、授業を作っていきたいと考えた。毎時間の授業で「わかった！」が生まれなくてもいいが、単元を通して「わかる」喜び、面白さを感じられるような授業づくりを目指していかなければならないと考えた。

5 今後の課題

2年間の大学院での学びを振り返ると、「学習意欲」「学習スキル」の視点で、生徒の実態を見取ることの大切さ、生徒の実態に合った手立てを試行錯誤していく大切さを学んだ。「わかる」授業を目指すために、素晴らしい実践を多く見ることができた。そのうえで、それらの実践を、ただ真似るのではなく、目の前の生徒と向き合い、生徒の実態を把握したうえで、教師として生徒たちに何を学ばせなければいけないのか考え授業をつくっていく必要があることを学んだ。

私は、教科としての社会科の「わかる」が、いま生きている社会で生徒たちが生きていくための力になるように指導力を身につけていきたい。